

「御翼の陰に」

～神様のところへ帰ろう～

詩篇 17: 6～15

■ 進まないボート

とある牧師先生が、彼女との初デートに池のある公園へと出かけました。早速ボートに乗り込み、彼は張り切って漕ぎ出します。ですが、ボートは心と裏腹に全然進みません。それもそのはず、陸地とつないだ紐が解かれていなかったのです。そこで大失敗と思われるようなエピソードから、牧師先生はそんな自分の様子を、わが人生になぞらえました。進みたいのに進めない。それは動かない原因に目をやらず、何とかして動くようにとボートをいつまでもこぐようなものである、と。さて、このように目線を固定し、わたしたちの心を固くするものは何でしょうか。前に進みたいのに、自分を縛りつけて進めなくしている、そんな古い紐＝価値観はないでしょうか？その古い紐は自分自身の過去です。いま、その過去のしがらみや傷や怒りを断ち切って、先取りの恵みに感謝して前を向いて進みます。

■ 神様の御翼の陰と暗闇の支配の影

詩篇 17: 8 私を、ひとみのように見守り、御翼の陰に私をかくまってください。

聖書の中で御翼、陰という言葉は、神様だけが使用が許可された特別な意味を持つ言葉として取り扱われています。それは、ひとみを閉じれば臉がそれを守るように、とてもデリケートで大切なもののようにあなたを見守り覆い問題から守るといふ、主の計画、摂理を意味しています。親鳥がひなを守るように、神様はあなたを御翼の陰に入れ守るのです。また御翼の陰とは、神様の右の手を表します。そして、右は神様の山の方向を指し、東、すなわち日の昇る方角を示しています。聖書が示す、当時のイスラエルにあって、太陽や晴れるというのは日照りを連想させるため、苦難や困難を意味し、雨は恵みなのです。聖書では、地形の表現からも私たちにメッセージを与えています。右手は神様の山、日の昇る東を中心に、左は西、死海は南に位置するので「前」の海、北に位置する地中海を「後」の海としています。そういう解釈で理解を進めると、前は南なので日照りの暑い苦難を意味し、後は北、過去を指しています。また西は日の沈む方向であることから、後ろ＝「過去」をも意味します。このように理解の土台にあって聖書を読んでいくと、先のことも思い患うな()、の先は、将来を指すのではなく、過去の苦難について語っているということが読みとれるのです。

■ 預言者エリヤの憂鬱

7代目の王、アハブ王と異国バアル出身の妻イゼベル
第1列王記 17章 1節～18章

あなたは何かから聞きますか？

長らく日照りの続く厳しい中で、アハブ王は、バアルの神(雨)を信仰する妻イゼベルの影響を受け、偶像礼拝の罪を犯します。イゼベルはほしいままに主の預言者を殺してしまいます。雨が降らないと預言したエリヤをも疎ましく思い、また雨の神を否定された思いの彼女は大変に頑なな価値観で、奇跡を見せたエリヤをとことん迫害します。エリヤは神様の助けのないことに疲れ果ててしまいますが、それでもあきらめず神様に向いて祈ります。神様は一時の助けではなく、アハブの改心という最終的な解決を計画されていました。雨が降らないからと雨が降ることを求めるのは、それは問題が起きた原因を探るのではなく、解決だけを求める行いです。問題の解決はいつも神様にしか存在しません。

■ 主を求めよ～答えと解決は神様の翼の陰に

私たちは、小学校に入る前の幼稚園や保育園で、手取り足取りサポートを受け、生きていくための基本的なことを学びます。では次の小学校ではどうでしょうか？次なるステージとして、自分で考え、行動する大切さを学び、自立し成長していきます。私たちクリスチャンの歩みもそれと同じです。神様の愛に気づき、良く味わい、包まれ、自分だけ満たされたままで良いのでしょうか。更なる祝福は、その受けた愛を隣の人に、今度は感謝を持って伝えていくという、流す愛のために用意されています。ですから、その愛を流し伝えるためには、もし怒りを覚える状況にあるなら、怒ったままに相手に伝えることをしてはいけません。まず神様に向き、祈ることです。

私たちはどのようにして御翼の陰に入れるのかを、クリスチャンとして愛を受け学び知っています。愛を受け続けていくうちに、互いに愛し合うこと、悔い改めること、あきらめずに問題に向き合うことの必要を十分に理解します。人として生きるために大切なのは形やルールではありません。大切なことを、自分の価値観やルールで裁いて伝えていては、伝えたいことは全く伝わりません。主に造られた姿になって、自らでハレルヤと御翼の陰に入り解決を求めていくこととしていきましょう。

■ 失望するな!! 聞くことを速やかに!

失望すると耳がふさがれてしまいます。失望すると本当に大切なことが聴けなくなるのです。間違った感情で自らで失望してしまうのではなく、困難にある時こそ神様に向いて助けを求めましょう。

マイナスの決断をする前にハレルヤと感謝できないときにこそ両手を挙げて感謝して祈り、愛の平安を受け取り、しっかりとそれを携えて、神様の家に帰りましょう。

■ 愛の平安、頑なを溶かす力

うなじを強くして自分を頑なにすることを止めましょう。自分の頑なを止める方法をそれは、感謝できないときにこそ、両手を挙げ、ただ神様だけをあがめ、その状況に感謝してとにかく祈ることです。

祈りより先に行ってはけません。考える前に祈り、問題の原因を探り神様に解決を聞かなければいけません。色々なものに目が向くと大切なものが壊れていきます。人間的な方法は上手くいきません。祈りしか変える力は得られません。」
身体全体で神様に向き直りましょう。

■ わたしの祈り

第一コリント 13章 4節～13章

神様にむけば髪はともにいることをなんとしても伝えてくださる。

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。

愛が基本にあるからこそ、喜びに満ち溢れるのです。

満ち溢れたものを流す時が来ました。

主にただ祈り求めます。祈ることではしか変える力は得られません。

頑なを捨て問題の中にあつてなお感謝して祈り、神様の愛を受け取ります。

(要約者:牧 三貴子)

(9月3日)